

[報告]

## 第13回アジア女子選手権大会報告書

佐々木 克 之

A Report of the 13<sup>th</sup> ASIAN WOMEN'S VOLLEYBALL CHAMPIONSHIP  
in Taicang, China

*Katsuyuki SASAKI*

## I. はじめに

2005年9月1日～9月8日まで中国・太倉市で第13回アジア女子選手権大会（2年に1度）が開催された。この大会は、アジアの女子12チームがA Group、B Groupに別れ、それぞれリーグ戦を行い、上位4チームがQuarter finals、Semifinalsを経てFinalsを行う形式であった。この大会の優勝チームは、2005年11月に日本で開催されるWorld Grand Champions Cup 2005の出場権を獲得する。この大会に全日本シニア女子チームの帯同審判員として(財)日本バレーボール協会（以下、JVAと略す）から指名された筆者は、帰国後（9月下旬）JVA審判規則委員会にこの大会の報告書を提出した。本報告書では、JVAに提出した報告書に追加して審判関係の問題点等を提起し、国内において開催される各種大会前のレフェリー・クリニックや審判講習会等、審判事業の参考にしようとするものである。

## II. 競技会役員

### 1. Control Committee（以下、C/Cと略す）Member

Mr. Takashi SUNADA (Delegate, JPN), Mr. Liu Chauyi (TPE),

Mr. Qu Zhengzhong (CHN), Mr. Songsak Chareonpong (THA)

### 2. Referee

Mr. Yuriy Gaponov (KAZ), Mr. Luke Yan (AUS), Ms. Kang Joo-Hee (KOR),

Mr. Prbakapan Vasu (IND), Mr. Ngugen-Van-Hung (VIE),

Ms. Alma M. Jocson (PHI), Mr. Hsu Pee Ying (TPE),

Mr. Senee Changpetch (THA), Mr. Ho Tat-ming, Samuel (HKG),

Mr. Wang Hong (CHN), Mr. Su Jianwu (CHN), Mr. Katsuyuki SASAKI (JPN)

### Ⅲ. レフェリー・クリニック

今回のレフェリー・クリニックは、試合会場（Taicang City Gym.）会議室において Asian Volleyball Confederation（以下、AVCと略す）のC/Cメンバー、北朝鮮を除く大会参加国の帯同国際審判員、開催国である中国の国内審判員が一堂に会して行われた。参加した中国の国内審判員（約30名）は、国際バレーボール連盟（以下、FIVBと略す）が今年から指定した新しいデザインのユニフォームを全員が着用していた。このユニフォームは、この大会のために準備されたものではなく、2008年開催の北京オリンピックのために中国バレーボール協会が準備・支給したとのことで、この大会も、北京オリンピックのためのトレーニングとして位置づけされているとのことであった。国内審判員がFIVBユニフォームを着用すること自体、常識では考えられないことであり、この事だけでも、中国バレーボール協会が北京オリンピックに懸ける思いを感じ取ることができた。

通常、国際大会におけるレフェリー・クリニックはTheory（講義）とPractical（実技）に分かれ、前者はOFFICIAL VOLLEYBALL RULES, REFEREEING INSTRUCTIONS, REFEREEING GUIDELINES, RULES OF THE GAME CASE BOOK等を資料<sup>3,4,5)</sup>として講義が行われ、後者は、モデル・チームを使用してゲーム運営を行うものである。しかしながら、今回のレフェリー・クリニックは新しいスタイルで進行された。前者では、C/Cメンバー一人一人が、前述した資料を基に質問をし、指名された受講者がそれに答えるという、ディスカッション形式であった。これは従来の形式よりもルール等に関する各個人の理解度と語学力（英語）を試すために有効な方法であったと思う。主な質問事項を列記すると、1) 不当な要求とは何か、2) 遅延に関する罰則は何か、3) マイナー・ミスコンダクトについて、4) ブロックの定義とは何か、5) 例外的な競技者交代とは何か、6) ゲーム・キャプテンの権利とは何か等であった。

また後者は、単にゲームを運営するだけでなく、その前にハンドリング基準、タッチ・プレーの反則、ネット際の反則等、各項目別の基本プログラムの判定を行った。これらは、日本で開催される国内大会時のレフェリー・クリニックと同じスタイルであり、各審判員の判定基準を統一させることは、大会運営の在り方として非常に有効であると思われる。

今回はAVCの大会であったが、FIVBの大会でもこのような従来のスタイルを変更しようとする傾向があり、私が2003年8月にポーランドで開催された2003 Girl's U-18 World Championship（日本チームは、SAASウイルス流行のため、タイで行われたアジア予選を棄権した）の指名を受けたときも、レフェリー・クリニックのTheoryでは、Theoretical Questionsとして、1) ブロックの定義、2) チームのファースト・ヒット、3) ネット・タッチの定義、4) リベロ・プレーヤーがオーバー・ハンドでプレーしたときの反則、5) 試合中プレーヤーが負傷したときの取り扱い、6) スコア・シートの記入問題等の筆記試験があった。

今後のレフェリー・クリニックの理想的な運営の仕方・方向性が示され、これらの方法から各審判員の個人評価が明確化されるようになるので、当然のことながら我々審判員は、その資質を向上させる努力を積み重ねる必要がある。

#### IV. 競技規則に関する取り扱い

##### 1. スクリーン

サーバーを隠す意思があるなしにかかわらず、サービング・チームのプレーヤー（集団）上をボールが通過した時点で吹笛するよう Referee Delegate から指示があった。この判定については、非常に難しいと思われるが、もし確信が持てたなら、そのセットの早い時点で吹笛すべきであろう。

## 2. 競技中断の手続き

同一チームによる複数の競技者交代の手続きを理解できていない審判員あるいは記録員がいた。競技規則には、詳細にわたって記載されていないので、REFEREEING INSTRUCTIONS, GUIDELINES, CASE BOOK<sup>3,4,5)</sup>をもっと熟読すべきであろう。

## 3. その他（特に北朝鮮チームについて）

すべての競技参加者は、競技規則を理解し、競技しなければならないが、私が主審を担当した試合中、北朝鮮チームが競技規則を本当に理解していないのか、あるいは故意に競技規則を犯しているのか、通常の試合では考えられない注意を何回か与えなければならなかった。北朝鮮から帯同審判員が参加していなかったのも真意は分からなかった（チームには英語が通じず、帯同通訳に説明しようとしたが、バレーボールには精通していなかった）。北朝鮮チームは、バレーボールの国際大会に参加するのはこのアジア大会くらい（2年に1度）であり、国際大会出場の経験が浅い上に、ルールに対する関心と情報が薄いのではないかと思われる。

(1) 競技中断中（テクニカル・タイム・アウト）、ウォーミング・アップ・エリアでボールを使用していた。（競技規則；第2章第4条第2項3に違反）<sup>1,2)</sup>

(2) 競技中（ラリーとラリーの間）、競技者が靴ひもを結び直すための中断を要求した。（競技規則；第5章第17条第1項5に違反）<sup>1,2)</sup>

## V. 競技運営について

1. この大会は9月1日～7日まで1日6試合、しかも第1試合開始が9:00、最終試合開始が21:00というハード・スケジュールで競技され、競技役員はもちろん、チームも大変だったようだ。特に競技役員のモッパー、ボール・リトリバーは、地元の大学生だったが、試合数に見合う人数が

足りず、1日6試合担当した学生も少なくなかった。そのため後半戦では疲労のために動きが悪くなっていた。最低でも3パートは確保しておくべきであると思った。

2. コートに敷かれたタラフレックス・ジェフロは、施工が十分ではなく、床とシートの上に空気が入って波打っていたり、シートとシートの間に隙間が空いてライン・テープ等が剥がれ、度々修理しなければならなかった。また、ネットのアンダーロープの張りが弱く、チームからのクレームで試合開始前に張り直したりしていた。会場内にはチーム席が確保されていなかったり、競技用具もお粗末なものであった。しかし、これらは日本で開催される国際試合が高い水準で実施されているから判断されることであり、すべて日本と同一基準にはできないということを改めて実感した。
3. 接遇に関しては、非常に良かったと思われた。まず、我々の送迎に関しては、審判員宿舎と会場とが車で10分程度の距離にあり、各試合開始時間の75分前と各試合終了15分後に審判員用のシャトルバスが運行されていた。食事に関しては、すべて宿舎内の指定されたレストランで取ることができたが、夕食は21:30までだったので、第5・6試合を連続で担当した審判員は、宿舎に戻ることができず、試合会場内の国際審判控室隣に設置された飲食ルームでフルーツやスナック等の軽食を取るしかなかった。

## VI. 施設（体育館）の状況について

1. 試合会場となったTaicang City Gym.は、約4,000人収容できる体育館で、大会本部、プレス、VIS、チーム控室、医事部控室、国際審判控室等、十分な設備が確保されていた。前述したとおり、国際審判控室隣に飲食ルームがあり、軽食と飲み物が準備されていた。体育館内には数名の警備員が常駐していたので、盗難等の事故はなかった。

2. Match Courtにはエンド・ライン後方の壁に大型電光掲示板があり、一般観客席は両サイド・ライン側の2階席だけで、1階には来賓席、報道席が約50席ぐらいつつ設置されていた。館内には冷房が施され、モッピング等に関するトラブルはなかった。

## Ⅶ. 競技会成績

### 【最終順位】<sup>6)</sup>

順位	チーム	順位	チーム	順位	チーム	順位	チーム
1	CHINA	4	KOREA	7	D.P.R..KOREA	10	AUSTRALIA
2	KAZAKHSTAN	5	CHINESE TAIPEI	8	VIETNAM	11	INDIA
3	JAPAN	6	THAILAND	9	PHILIPPINES	12	HONG KONG

## Ⅷ. 最後に

今回の第13回アジア女子選手権大会を経験して感じたことは、まず第一に競技会運営に関するレベルの格差であった。AVCの審判委員長として長年にわたり多くの大会を見てこられた砂田孝士氏は、「これでも昔と比べれば、良くなった」と言っておられたが、開催地競技役員の意識改革も含めて国際レベル（2008年に北京オリンピック開催）まで向上させるのには、まだまだ時間と労力（指導）を費やさなければならないことを痛感した。しかしながら、前述した国内審判員のユニフォームの統一やスコアラー、アシスタント・スコアラーが審判技術はもとより簡単な英会話能力を持っていることは評価に値すると感じた。オリンピックを含めた国際試合では、主審・副審を担当する国際審判員とのコミュニケーションは英語であることから、現在はレフェリー・サポート・スタッフについても英会話能力の可否が問われているからである。第2に、これからの理想的なレフェリー・クリニックの在り方についてである。現在の国際試合では、主審と副

審は審判評価表によってその試合運営・管理内容を詳細に点数化される。従って、その資質を高めるためにも Theory（講義）はいくつかの事象を取り上げ、互いにディスカッションして明確に整理していくというスタイルが望ましいし、時にはルールに関する理解度を確認するために記述形式もあって当然であると思われる。Practical（実技）は単にモデル・チームを使った試合を運営するだけではなく、ハンドリング基準（特に2段トス）やネット際のプレー等について個々の技術を判定し、統一した基準を確認することが重要となるであろう。

最後に、今回の海外遠征派遣に深いご理解とご協力、ご指導を賜りました、本学理事長・学長、高柳元明先生をはじめ、体育学教室助教授、平間紀美子先生に衷心より感謝を申し上げます。今回の貴重な体験を審判活動のみならず、本学学生の教育にも生かせるよう、誠心誠意努力する覚悟です。今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。



**参考・引用文献、資料**

- 1) 2005年度版 6人制バレーボール競技規則；(財)日本バレーボール協会 P.28, 67
- 2) 2001-2004 OFFICIAL VOLLEYBALL RULES ; FIVB P.31, 89
- 3) REFEREEING INSTRUCTIONS 2002 Edition ; FIVB
- 4) REFEREEING GUIDELINE 2002 Edition ; FIVB
- 5) 2001-2004 RULES OF THE GAME CASEBOOK ; FIVB
- 6) BULLETIN No.9 2005-09-08 ; The 13<sup>th</sup> ASIAN WOMEN'S VOLLEYBALL CHAMPIONSHIP